



購読申込先

NOSAI 宮城 仙台市青葉区上杉 1丁目3番地10号 〒980-0011 電話022(225)6701 http://www.nosaimiyagi.or.jp/

備えの種をまこう。



「子供にも自信を持って食べてもらえ。安全で高品質なイチゴを作り続けたい」と佐々木さん

仙台市 佐々木 綾子さん

【仙台市】仙台市若林区の佐々木綾子さん(32)は、ハウス13坪でイチゴ品種「みずのか」を栽培する。2006(平成18)年からJ.A加美よつばで営農指導員を6年間務めた。農家と接するなかで、自らも農業に取り組みたいと、その後、山元町の法人で3年間イチゴ栽培を学び、昨年、名取市で営農を開始した。

味濃く香り高く

「高品質なイチゴを追求して、年間10万当たり4トンの収量を目標したい」と抱負を語る佐々木さんは、これからも土耕栽培にまい進する。(櫻井)



「地域農業に貢献したい」と矢走さん

大崎市鹿島台 矢走 尚哉さん

【大崎市鹿島台】「農業は昔から身近な存在。この道を目指すのは、自然なことだった」と語る、大崎市鹿島台の矢走尚哉さん(21)は、幼いころから家族の営農の姿を見て育った。

加美農業高校を卒業後、県農業大学校水田経営学部で学び、昨年、実家で就農。水稲20畝、飼料用米4・5畝、大豆14畝、ホウレンソウ18畝と兼営22畝を栽培する。

大学では、水稲の直播技術や施設を研究した。育苗の間と施設が不要なため、省力化・低コストで規模拡大

期待に応えたい

減を目的にしたりすると、農業の難しさを実感する。今後は、祖父から指導を受けている機械作業をメインで担っていく予定。無人ヘリやドローン(小型無人航空機)の操作資格取得にも取り組んでいる。

鹿島台地域農作物防除対策協議会への参画や、作業を通して地域の人たちとコミュニケーションを図りながら、地域農業を学ぶ。「高齢化が進んでいることとあって、家族、地域の人たちからの期待を感じ。『あまり無理はしないように』と温かい声掛けがありがたい」と担い手として、貢献しようと努力する矢走さん。(大友)

担い手たち

ふるさとの原風景の維持や耕作放棄地の解消のためには、担い手の確保が重要な課題となっている。2月2週号に続き、ふるさとで活動する担い手にスポットを当て、農業への思いや決意、展望を聞く。

Part2 地域の活力



「就農当初の苦労が、現在の栽培に生かされている」と高橋さん

栗原市 高橋 敦司さん

【栗原市】パンジー、ピオラマリーゴールドなど、50品種30万ポットの花壇用苗を25坪で生産する栗原市。若柳の高橋敦司さん(42)。県農業短期大学(現・宮城大学食産業学部)園芸科で花卉を専攻し、卒業後は市内の農業法人で2年間研修。1999(平成11)年、実家で就農した。

「米農家の両親と別の栽培品目に挑戦したかった。高校生のとき、家庭園芸を始めたことから植物に興味があった」ときっかけを話す高橋さん。就農後は、栽培技術が未熟で、出荷に至らないことや、労働力が足りず、収穫が間に合わないこともあった。販路の確保と、価格が安定するまで10年かかった」と就農当初の苦労を振り返る。

栽培のポイントは、観察を徹底し、灌水・施肥の適期を逃さないこと。保温にトンネル栽培を行い、低コスト化に努める。情報収集も欠かせない。J.A栗つこの花苗部会長を務め、仲間と販売先の開拓や省力術を共有。27人で構成する県鉢物生産組合にも加入し、年5回の研修で、県内花卉農家との意見交換を経営に生かす。

仲間と情報を共有

高橋さんは「品質向上を目指し、日持ちする花苗を提供したい。また、収入の安定のため、受注生産に対応していきたい」と抱負を語る。(及川愛)

名取市 渡邊 翔さん



「周りに助けられながら、日々の作業、一つ一つが勉強になる」と渡邊さん

先輩から受け継ぐ

【名取市】先輩たちは、農業の知識や地域のことを一から教えてくれる。農業経験がない自分でも、この環境だからこそ続けられる」と話す、名取市下余田の渡邊翔さん(28)。岩手県出身で、昨年、妻の実家に後継者として就農した。セリ25坪、水稲1畝、長ナス10坪、エタマ30坪を、義理の祖父母と3人で栽培する。

異業種から就農した渡邊さん。農業の魅力は、努力の成果が作物に表れることだといふ、手応えを感じている。また作業の進捗を見て、時間を自由に確保できるのも魅力の一つで、3人の子供たちと過ごす時間を大切にしている。昨セリは露地栽培と施設栽培、両方手掛けている。昨

(高橋康)